住まい活動助成

未来型子育てプロジェクト

広島県広島市

築120年の古民家を大人が手づくりで子どもの居場所づくりを行う活動







民家は、広島市 の中心部から少 北側に外れ た市街地にあ る。周辺で生活

団体設立経緯

私たちの団体があるのは広島市 の市街地で、子どもたちの多様な 活動の場が簡単には見出せない場 所です。そんな中、子どもたちが 旅立っていく20年後の未来を見据 えた子育ての環境づくりを目指し、 保育園・子ども園の関係者とそれ に共感した市民が集まって設立しま した。

活動概要と活動対象範囲

築120年の古民家を改修しなが ら、大人の手作業で子どもの居場 所をつくる活動をしています。この 民家には、つい30年前まで普通

だった広い土の庭があり、木々に は鳥がたくさん来ます。目標は、そ んな環境をもう一度子どもたちの 遊び場にして、大人たちも居心地 のよい、自分の家のように感じら れる居場所をつくること。月1度の 頻度で集まって、修理・修繕が必 要な箇所を大人がつくろい、子ど もたちは古民家ならではの遊びや 木工をしています。

また不定期でマルシェなどイベン トをして多世代交流の場を設けて います。古民家は広島市中心部か ら10分足らずの市街住宅地にあり、 周辺に暮らす子育て家族や働き盛 りの世代を対象にしています。

活動に至った理由や背景

この地域は、都市中心部と郊外 住宅団地の狭間で散発的に開発さ れたミニ住宅地やマンションが集 まったようなところで、地方都市に は珍しく人口が増加しています。た だ、子どもたちの日常生活では遊 びの空間が限られ、新しい家族に とってはリアルな交友関係を築きに くいといった課題がありました。

一方で、拠点に選んだ昔ながら の農家型の古民家は、人口増加の 地区では利用しにくく、20年間空 き家でした。新しい住宅にはない 広い和室、縁側、土の庭は、むし ろ子育てと相性が良い、という思 いつきから、耐震工事を経て活用 することになりました。

活動内容と成果

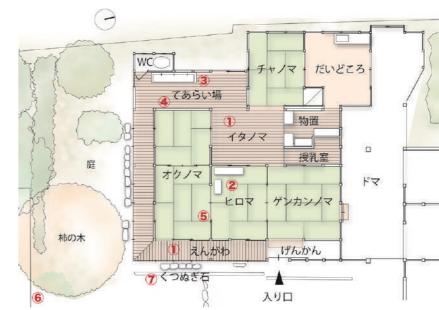
■DIYワークショップの企画

耐震工事こそ専門業者が施工しま したが*、内装は未完成でした。そ こで、無垢板や塗装の材料だけを 協力業者から提供してもらい、床張 り作業やその他の内装工事について はボランティアによるセルフリノベー ションを企画することにしました。

参加者にはできるだけリピーター になってもらいたいという思いから、 活動にはできるだけ詳しい人に関 わってもらうこと、多彩な作業に取 り組めること、1回の作業時間で疲 れすぎないことを指針にして、1年 間のワークショップスケジュールを 組みました。床板張り、手洗い場 壁の製作、棚づくり、カフェカウン ターの設計、透明間仕切りづくりと いった内容で、地域のDIYアドバイ ザーと建築の設計者をスタッフに 取り込み、月に1度、日曜日の午 前中だけで活動を始めました。

■大人も子どもも巻き込むための 工夫

「居場所として使うのは修繕工事







古民家の平面図(上)と、DIYによるリノベーショ ンの様子。2022年4月には、イタノマの床板を ワークショップ形式で施工した(下左)。講師 に教わりながら電動工具も扱う(下右)

が完了してから」という方針では、 普通の施設と代わり映えしません。 家をセルフリノベーションする過程 では、次はどうしたらよいかな、何 をつくろう、といった自分で考える 創作の楽しみがあります。これを 多くの人と共有すること、子どもた ちにはそれを感覚として知る機会が あることが、この古民家が提供で きる価値であり、また他にはない独 自のプログラムになると考えました。

ワークショップのプログラムは同 日に大人向けDIY、子ども向けの2 種類を用意しています。とはいえ、 子どもに大人が付き添う場合もあ るので、完全な区分けはなく、好 きな方にいつでも参加できるよう になっています。すると、大人は自 分がやりたいDIY作業だけをする ことになるのでモチベーションが一 様に高く、その楽しそうな様子を 見て1時間もすると子どもたちも参

入してきます。

その際、スタッフに保育のプロ がいるお陰で、子どもたちが邪魔 になることなく、大人と一緒に作 業できる環境が実現できています。 さりげなく安全を管理し、自然に 子どもと大人の橋渡しをしていま す。こうした状況が続き、大人た ちが面白がって場をつくることが、 「楽しい居場所」というメッセージと なり子どもたちに伝わっていること に気付いたのです。

それ以降は「古民家を修繕する」 というハード整備にとどまることな く、「古民家で○○をする」という 企画が自然と大人たちから出てくる ようになりました。「実は楽器が得 意です」、「実は占いができます」、 「マッサージの資格を持っているの で1日だけお店をしたいです」という ような、地域で隠れていた人材が 続々と現れ、それらは不定期のマ











1.12月に開催した子ども向けのワークショップ。自然素材を使って、冬用の飾り物をつくる 2.子どもたちが6月に仕込み、7月に完成した梅シロップ。爽 やかなかき氷に 3. ワークショップ開催日、午後の古民家開放タイム 4. 冬は庭の焚き火に子どもが集まる 5. 保育園や小学校が違っても仲良しに

ルシェイベントとして結実しています。 こうした企画を通して、大人それ ぞれが内面に閉じ込めていた小さ な夢を実現しています。これまで 慌ただしい都市の中では得ること ができなかった楽しみと言えるで しょう。それこそが、都市の中に ある古民家が提供できる場の役割 だと考えています。

■子どもたちのエピソード

大人たちが作業をしている間、 余った木材などを利用して、子ど もたちもワークショップを楽しんで います。工具の使用も制限は設け ず、スタートしたばかりの頃はヒヤ ヒヤしながら大人が全力で手を添 えていました。しかし回を重ねるご とに道具の使い方にも慣れてきて、 安心して見ていられる子どもたちも 増えました。

中には「今日は小さな棚をつくっ てみようと思う」などと、古民家に ある材料や工具から、自分のつく りたいものをイメージして創作しよ うとする子どもたちの姿も見られま した。ワークショップで培ってきた

経験を経て、自ら考え、やってみ ようとする意欲へとつながっている ようです。

子どもたちの年齢層は幅広く、 これまで1歳から中学2年生までが 参加しています。そんな子どもたち と一緒に、木工以外にも季節に応 じた様々なアクティビティや実験に チャレンジしています。梅シロップ づくりにかき氷づくり、お団子づく りにバームクーヘンを手づくりする 会など、大成功することもあれば なかなかうまくいかないこともあり ます。結果はどうであれ、同じ目 的に向かう過程の中で、度々子ど もたち同士の一体感が生まれてい ます。

中でも盛り上がったのが、"柿の 葉の天ぷらづくり"でした。「柿の 葉の天ぷらって…おいしいの…?」 と、大人もちょっとドキドキするほ ど、誰も食べたことのない珍味。 古民家にある柿の木に登っては子 どもも大人もみんなで葉っぱをあ つめ、その場で天ぷらにして食べ てみました。すると、なんだかモ

チモチしていて、おいしいのです。

そのうち、葉っぱを取ってくる子、 天ぷらを揚げる子、できあがった 天ぷらを古民家にいる人たちにデ リバリーしてくれる子と、自然とそ れぞれの役割が生まれ、子どもた ちは生き生きと自分の役割を全う しながら楽しんでいました。子ども たちだけでなく、その場にいる大 人と一緒になる体験ができたこと で、同じ感動をみんなで味わうこ とができ、より一層一体感が高ま りました。

そんな経験が子どもたちの心に も残っているようで、「また柿の葉 で天ぷらしたい。よもぎの天ぷらで もいいよ」と話をしてくれたYくんが います。小学6年生だったYくんは、 中学受験を控えて塾に通い、夜な 夜な勉強をしていました。ワーク ショップの日には「楽しみすぎて、 早く来すぎてしまいました」と朝一 番に颯爽と自転車で登場したり、 古民家にいる時でも習い事の時間 が近づいてくると「(習い事に)行き たくない…」とお母さんに連絡をし

たりする姿がありました。

そんな姿を見て、時にご両親も、 今日は行かなくてもいいよと、Yく んの思いを尊重してくれることもあ りました。ここでは、自然と自分 の役割を見出し、生き生きと過ごし ている子が多くいます。そしてその 子たちは自分から「古民家に行き たい」と言うのだそうです。

どうしてそんな場所になってきた のかなと考えた時に、古民家に集 まる大人たちの姿が浮かびました。 常に子どもたちと対等な立場で楽 しむことができる大人たち、そして 時に"親"という役割を忘れられる 時間や空間がそこにあるというこ とが、子どもたちにとって居心地の 良さにつながっているのではない かと感じます。

■大人たちの変化

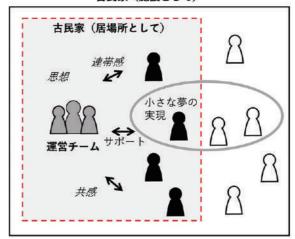
単に建物を直すだけという当初 の動機から広がって、様々なイベ ントが企画されるようになった時期 には、古民家活用のためのアイデ アを持ち寄った研究会やミーティン グが開かれるようになりました。ギ フトシェアリングによって居場所を 提供する「ふるまいシリーズ」、ワー クショップの午後にただ古民家を 開放して自由に過ごせる「古民家開 放タイム」、子どもが自主的に出入 りできる「宿題オープンスペース」な どの企画が、その中から生まれて きました。

こうした自発的な有志をスタッフ に加えて、23年度から新しい団体 に改変し、プロジェクトを継続して いくことになりました。この1年を 経て、古民家はいまや当初のがら んとした空き家ではなく、様々な 人の思いを受け止める場所になっ てきています。

課題と解決方策

現代の社会では、進学や就職な

古民家 (施設として)



運営体制のイメージ図。古 民家のコンセプトに賛同し たファンを年会員としてイ ベントなどに積極的に巻 き込み、個人が自発的に、 それぞれができる事やした い事を形にできる場として 運営する。23年6月には新 たにプロジェクト運営を専 門とする任意団体「オープ ンスペース西原古民家つむ ぎつむぐ運営団体(仮称)」 を立ち上げて、活動を継 承していく予定



スタッフ(活動団体のメンバー)



古民家のコンセプトに賛同した年会員



イベント毎の参加者

ど自分の所属が変わる節目で居場 所や交友関係が一変します。一方、 子どもたちにとってはその成長の 過程で、安心できる居場所が途切 れることなくあり続けることが大切 だと考えて、当プロジェクトを進め ています。

しかし、この古民家は自主的に 集まった有志グループによる運営 であり、目標が「楽しみ」や「居場 所 | というように抽象的であること もあって、その継続性が課題にな ります。場所を支える大人側のモチ ベーションを維持するための、運営 上の工夫が必要となります。新組織 の体制では、古民家を自分の大切 な場所と認識するようなリーダー格 が複数存在し、また負担が個人に 偏らないようなチーム方式の運用に チャレンジしていく予定です。

居場所づくりと領域形成は、縄 張りをつくることとも言え、閉じた

コミュニティ、閉じた環境になりが ちです。インターネットでの情報発 信に加え、地域を意識した発信や 庭づくりなどを工夫することで、必 要とする人たちにいつも開かれた 場所であるようにしたいと考えてい ます。

今後の予定

より快適に過ごせる施設とする ために、セルフリノベーションを続 けます。いつも手を入れている、 いつ行っても何かやることがあると いうのが理想です。また、共感し てくれるファンを増やし、その善意 による運営を意図し、年会費によ るメンバーシップを導入して安定し た経営を目指します。そして地域に 開いた場所として常に情報をオープ ンに公開していくため、ホームペー ジとSNSを立ち上げて運用していく 予定です。

未来型子育てプロジェクト

2012年6月設立/メンバー数:8人/代表者:堀江 宗巨(ほりえ・むねおみ)

∠nishihara.tsumugitsumugu@gmail.com

nishihara2626.jp/

私たちは、子どもたちが旅立っていく20年後の未来の社会を見据えて、子育ての 環境づくりやイベント企画をしています。

86 2022年度 住まいとコミュニティづくり活動助成